2016 年 11 月 17 日、京都大学における

（東京・上智大学の）河崎健教授への

2016 年フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞授賞にあたっての

ヨアヒム・ガウク連邦大統領の

授賞の辞

1922 年に、ドイツが産んだ恐らく最も有名な科学者と言える人物が日本を訪れています。アルベルト・アインシュタインです。アインシュタインは、ここ京都で講演を行い、日本旅行のさ中にこんな言葉を書き留めています。

「日本に行って見る機会が眼前にありながら、それを活かさなかったとすれば、一生自分を責めることとなっていたであろう。」

それと同じ思いをしたドイツ人は、アインシュタインの後も枚挙にいとまがなく、今の私もまさにその思いであります。本日皆様方のところにうかがえて、嬉しく思います。

アインシュタインの訪日は、長きにわたる日独学術関係の中でも特筆すべき出来事です。この日独学術関係の黎明期にまずあったのは医学でした。そして、医学と言えばフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトでした。医師であったシーボルトが、後に日本研究家、博学者、そして両国間をとりもつ極めて重要な人物の一人となっていったのです。シーボルト賞がまさにシーボルトにちなんでいる由縁であります。

本日、これまで6名のシーボルト賞受賞者を輩出している、ここ京都大学という名門校で授賞式を行えることは、私にとって格別の栄誉であります。シーボルト賞は日独協力においてもはや欠かせない存在の一つであると同時に、学術面の両国関係の質の高さを表すものともなっております。この賞が持つ輝きの力は、受賞者の皆様方ご自身のおかげによるものでもあります。受賞者の方々の専門分野は実に様々ではありますが、その皆様に共通しているのが、賞の名前にもなっておりますシーボルトのような知識に対する好奇心と知識欲、率直な開かれた心、そして国境を越えての協力をいとわないという気持ちなのです。

そして今申し上げたようなことは、勿論本日私共がその栄誉を讃える東京・上智大学の河崎健教授にもあてはまるのです。河崎先生は独文学、政治学を専攻され、ドイツの大学に研究者として何度も訪れておられます。河崎先生の業績は、その学術的な質が優れていることもさることながら、政治に対して有する関係性も特徴となっています。河崎先生の学位論文では、ドイツの政党が政治のエリートをどのように擁立するのか、という問題と取り組んでおられます。河崎先生の業績一覧を拝見しますと、ドイツの政治のその時々のテーマが一堂に会した感があります。例えば「統一ドイツにおける政党制度」、或いは「欧州の統合とドイツの内政」といったものもあります。

ドイツの政治の精通者として、しかしまた、日本ドイツ学会の役員のお一人として、先生は日本におけるドイツ政治への理解を深めると同時に、ドイツにおいても私共に外から見た場合の見方に気付かせて下さっています。そのことに、私は感謝致します。

先生は、私共の政治制度の根幹に関わる問題をご自身のテーマとされています。例えば、民主的決定プロセスは、いかにすれば成功するのか、といった問題です。そうした複合的なプロセスを取り上げることは、まして大学の研究者が取り上げるということは、権威的な考え方、そしてポピュリズムの風潮が影響力を増す世界にあって、一層重要になっているとさえ言えます。だからこそ余計に、本年のシーボルト賞を受賞なさる先生に心からお祝い申し上げたい気持ちなのです。

と言うのも、先生や他の研究者がそうした問題の答えを見出せば、それは私共を民主主義者として一つに結び合わせるものでもあるからです。日本とドイツは、自由と人権という基本的価値観を共有しております。両国共に法治主義、そして法の支配に基づく国際秩序を旨としております。両国共、非常に似通ったチャレンジに直面しております。人口動態の変化は、両国共に長期にわたり爪痕を残すことでしょう。また、気候変動がもたらす影響も、日独共通の今後の課題ですし、世界共同体全体にとっても同様であります。

だからこそ、両国の学術協力がこれほどにも密接であることは、良いことですし、重要なことなのです。何故なら、現代の迫り来る問題への答えを見出すには、イノベーション、そしてパイオニア精神が必要とされるからです。

日本には、学術・研究の為の素晴らしい条件が整っています。科学先進国日本がいかに実績をあげているかを、つい数週間前にもノーベル賞委員会の決定が如実に示しております。即ち、既に 2015 年、そして 2012 年もそうでしたが、今年も医学賞が日本人研究者に授与されることとなりました。

また、二年前には三名の日本人の材料研究者がノーベル物理学賞を受賞されましたが、その対象となったお三方の発見は、今や殆どのスマートフォンに使われているものです。しかも、近年日本人が受賞されたノーベル賞は、今申し上げた分だけではないのです。日本人研究者は数多くの将来性ある分野で先端を行っておられ、ナノテクノロジーやロボット工学、ライフサイエンス、環境技術などはそのほんの一例に過ぎません。また、特許出願数では、ドイツもそうですが、日本は既に何年にもわたり上位を占めています。

ご一緒に、科学面での協力を更に強化していこうではありませんか。お互いが刺激し合って、新しい発見につなげていこうではありませんか！

この会場にご来席の皆様全員に、あと二つお願いがございます。日独学術関係とその未来の為に今後とも引き続きご尽力下さいますように。そして、その意志が若い学生、大学院生達にも脈々と引き継がれるよう、お願い申し上げます。